●主略「人ハ」「人ハ」

(1)主語ウマイゴチソウモ毎日タベルト、シマヒニハイヤニナリマス　副詞句　副　補　説

(2)主語オモシロイアソビモ毎日見ルト、シマヒニハアキテキマス。　副詞句　副　説

教法

(一)文章(1)(2)を聽寫せしむべし。聽寫の際左の取扱をなす。

(1)主語は「タレモ」となすが最適當なること、

(2)「ウマイ」「シマヒ」「オモシロイ」等の假名遣を誤らざること、

(3)「毎日」「シマヒ」「イヤ」「アキ」等の語句の意義

(二)讀方話方の練習をなすべし。

(三)應用練習せしむべき文章、

(1)ウマイ　オクワシ　モ　毎日　オナジ　モノヲ　タベルト、シマヒニハイヤニ　ナリマス。

(2)キレイ　ナ　ハナモ　毎日　オナジ　モノヲ　見ルト、シマヒニハアキテ　キマス。

(3)アキテ　イヤニ　ナッタ。アイタカラ　イヤニ　ナッタノダ。

(4)ケフ　デ　シゴト　ガ　オシマヒニナッタ。

(四)讀本の朗讀をなさしむ。

第二時

教材　ソノウチニ……カヘリマセウ。」トイヒマシタ。

（自六九頁六行　至七〇頁五行）

要項

內容＝浦島太郎が乙姫に歸りたき旨を述ぶること、

形式＝(語句)―カヘリタクナッタ、アル日、オセワ、アマリナガクナル、(假名遣)―オセワ、アリガタウ、モウ、(語法)―ソノウチニ、カラ、ガ、

形式

(一)語句並に語法

○**オセワ**　「せわ」とは人の爲に骨を折つて、盡すことをいふ。「お」は接頭語で、敬讓の意を有してゐる。

○**アマリ**　「あまり」は「殘り」の意に用ふる場合と。「はなはだしく」の意に用ふる場合とあり。ここにては「はなはだしく」の意、「あんまり」に同じ。

○**ソノウチニ**　は副詞である。「近きうち」「近日」などの意。用例そのうちにもうかがひしませう。

○**ガ**　「ありがたいがかへります」「繰り返し讀むが分らぬ」などの如く、用言助動詞の終止形に附いて或事柄が他の事柄と乖離して居る意を示す時に用ゐる。

(二)文章

(1)

ソノウチニ	ウラシマハ	ウチヘカヘリタクナツタカラ、	アル日オトヒメニ	副詞句	副詞句
主					
「主	補修	補	説(副句)	説	接
畧	イロイロオセワニナツテ		アリガタウゴザイマスガ、		副詞節
副	補	説			
カラ、モウウチヘカヘリマセウ。」					
(副詞節)	説				
ト	イヒマシタ。				

教法

(一)文章を次の如く聽寫せしむべし。

ウラシマハ　カヘリタク　ナツタ　カラ、　オトヒメニ
「オセワ　ニナツテ　アリガタウ　ゴザイマスガ、　モウ　カヘリマセウ」
トイヒマシタ。

右の讀方話方の練習をなすべし。

(二)次の各項の如く聽寫せしめたる文章を修飾せしむべし。

(1)「ソノウチニ」にて「カヘリタクナツタ」を修飾す。
(2)「ウチヘ」の補語を添へて「カヘリタクナツタ」と「カヘリマセウ」とを修飾す。
(3)「アル日」にて「イヒマシタ」を修飾す。
(4)「イロイロ」或は「タイソウ」等にて「オセワ」を修飾す。
(5)「アマリ　ナガク　ナリマス　カラ」「チチ　ハハガ　コヒシク　ナリマシタカラ」等にて「カヘリマセウ」を修飾す。

(三)讀本を朗讀せしめ次の問答にて內容を整理す。

(1)何故に浦島が　うちに　かへりたく　なつたのであるか。
(2)浦島が乙姫に何と言つたか。
(3)浦島が乙姫にどんな　おせわに　なつてゐたか。

四)應用練習せしむべき短句短文

(1)ソノウチニ　カヘツテ　キマシタ
(2)オトヒメサン、タイソウ　オセワ　ニナリマシタ。
(3)アマリ　ナガク　アソビ　マシタカラ　モウ　カヘリマセウ。
(4)オモシロク　ナイカラ　モウ　カヘリマセウ。

綴方

(一)讀本の文章を暗誦せしめて暗寫せしむべし。

第三時

教材

オトヒメハ……ハコヲワタシマシタ。(自七〇頁六行至七二頁二行)

要項

内容＝乙姫、浦島太郎に別離を述べ玉手箱を贈ること。

形式＝(語句)―オナゴリヲシイ、オワカレノシルシ、ケツシテ、タマテバコ、(假名遣)―ヲシイ、オワカレ、マウシマセウ、(語法)―ソレハ、ガ、シカシ、オアケナサイマスナ、

教材解釋

内容

○タマテバコ(玉手箱)　浦島太郎が、龍宮に行つて得たといひ傳へる匣の名から、轉じて、重寶な物品、または秘密なことなどを、をさめておく匣の名になつた。

形式

(一)語句並に語法

○オナゴリヲシイ　「ナゴリ」(名殘)とは物事の過ぎ去つて後、その面影などの殘つて居ること、その意よりして「オナゴリ」とは旅立などの爲に人と別れること。

「オ」は接頭語で他を敬ひて用ふる語。「ヲシイ」とは思ひ切つて手ばなしがたいさまに使ふ語。

○**ケツシテ**　副詞である。たしかにそうときめていふことば。どうしても。きつと。用例　けつしてまちがひはない。

○**ソレハ**　事物の代名詞で中稱である。之に對して「コレ」は近稱「アレ」は遠稱

○**ガ**　お名殘惜しいといふことをいひおへて、玉手箱を上げるといふ意に移る爲に用ひたのである。「この花はたいそう美しいが何といふ花だらう」の如く用言及助動詞の終止形に附いて或事を言ひおへて他に移る意を示す時に用ひる。

○**シカシ**　上の事柄と、その事柄から起る反對の事柄とを、接續するに用ひる接續詞である。「さりながら」「さういふけれども」の意。

○**ナ**　「オアケナサイマスナ」の「ナ」は、動作を禁じ止むる語で動詞及助動詞の連體形の下に用ひられる天爾乎波である。用例、「どうぞお見捨てあそばすな」

(二)文章

(1)　主
オトヒメハ

●主略ハ「私ハ」「アナタハ」

主　副　補　説
「ソレハマコトニオナゴリヲシイコトデゴザイマスガ、ソレデハ、主略オワカレ
句　客　説明語　接　副
ノシルシニコノハコヲオ上ゲマウシマセウ。シカシ主略ケツシテフタヲオ
説　副詞節　客　修　客　説
アケナサイマスナ。」
トイツテ、タマテバコトイフリツバナハコヲワタシマシタ。

教法

(一)次の發問をなして復習的豫備となす。

(1)浦島が乙姫に何と言つたか、

(2)何故に浦島はうちに歸りたくなつたのであらうか。

(二)文章の要領を次の如く聽寫せしむ。

オトヒメ　ハ
「ソレハ　オナゴリ　ヲシイ　コト、　オワカレノ　シルシニ　コノハコ
ヲ　アゲマセウ、　シカシ　フタヲ　オアケ　ナサイ　マスナ。」
トイツテ　リツバナ　ハコ　ヲ　ワタシ　マシタ。

聽寫の際「チシイ」「オワカレ」等の假名遣につき注意を呼ぶべ

し。

讀方話方の練習をなさしめ、左の語句の意義用法を授く。

(1)ソレハ。オナゴリヲシイ。オワカレノシルシ。シカシ。オアケナサイマスナ。

(三)次の順序にて語句の修飾の練習をなすべし。

(1)「マコトニ」或は「ナカナカ」にて、「オナゴリヲシイ」の説明語を修飾す。

(2)右の句に「デゴザイマスガ」を添加して意味を完全せしめよ。

(3)「アゲマセウ、」を「オ上ゲマウシマセウ」に訂正して示すべし。

(4)「ケッシテ」或は「カナラズ」にて「オアケナサイマスナ」の説明語を修飾す。

(5)「タマテバコトイフ」にて「ハコ」を修飾す。

(四)教科書にて通讀せしむ。

(五)應用練習せしむべき短句短文。

(1)アノ本ハ　タナニ　上ゲ　マシタ。コノ本ヲ　マ、タ　ニ　上ゲマセウ。(「上げ」の意義の異なるを知らしむべし)

(2)ワカレル　ノハ　マコトニ　ナゴリ　ガ　ヲシイ。

(3)ケッシテ　オワスレ　ナサイ　マスナ。ケッシテ　ワスレマセン。

綴方

(一)本文の暗寫をなさしむ。

第四時

教材　ウラシマハハコヲ……一人モアリマセン。(自七二頁三行至七三頁一行)

要項

内容＝浦島太郎、鄕里に還つて世の遷り變りの甚しきに驚くこと。

形式＝(文字)―海、知　(語句)―海ノ上、出テ來、カヘッテ見ル、オドロキマシタ、ジブンノウチ、トモダチ、(假名遣)

―カヘッテ、(**語法**)―マタ、モ、(**修辭法**)―オドロキマシタ

の語句の置き場所、對句法(第二の文章)

教具　教科書の挿畫、

教材解釋

形式

(一)文字

○**海**　シ毎解分　偏を「サンズイヘン」と名づく。母毎比較

○**知**　ヶ一人口解分　偏を「ヤヘン」と名づく。

○**オドロキ**　たまげること。びつくりすること。即ち俄かに思ひの外なる事に遇ひて心さわぎて、びつくりすること。

○**マタ**　をこの「また」は接續詞の事物累加の意味の「又」にあらず、物事を反覆す、といふ意の「復」である。これは「のいて」の説明語を修飾せる副詞。

○**オドロキマシタ**　の詞は文章の終末にあるべきが順序なるも、ことさらに結果の「オドロイタ」をさきにおいて、おどろく原因を後に叙したのは、おどろいた

一人はイチニンとよますべし。

の意を強く示さんが爲てある。猶「ウレシイ、今日ハ日曜日デ」「キレイダ、此ノ花ハ」などのごとし。

(二)文章

(1)ウラシマハ　主　バコヲモラツテ、　副句　マタカメノセナカニノツテ、　副句　海ノ上ヘ出テ來マシタ。　補　説

(2)主略　ウチヘカヘツテ見ルト、　副詞句　オドロキマシタ、　説　父モ母モシンデシマツテ、　主　ジブンノウチモアリマセン、　説(副詞節)　トモダチモミンナキナクナツテ、　副(副詞節)　知ツテキルモノハ一人モアリマセン。　主　説(副詞節)　副

教法

(一)次の發問と書取とを課して復習的豫備とす。

(1)浦島がかへらうと言つた時に乙姫は何といひました。

(2)浦島は何と言つて別れを告げましたか。

(3)書取、キツト　コノ　タマテバコ　ハ　オアケナサイマスナ。

(二)文章(1)をその主要節のみ聽寫せしむ、此の時「海」の新字教授、

ウラシマ　ハ　海ノ上　ヘ　出テ來マシタ。

次の順序にて說明語を修飾する練習をなせ、

(1)ハコヲ　モラツテ　出テ來マシタ。

(2)マタ　カメ　ノ　セナカ　ニノツテ　出テ來マシタ。

(3)ツリザヲ　ヲ　カタゲテ　出テ來マシタ。

(三)文章(2)を本文のまゝに聽寫せしめ左の各項の取扱をなす。

(1)知の漢字教授、(2)「父、母、見」の漢字書方復習、

讀方話方の練習をなし左の修辭上の取扱をなせ、

(1)父モ母モ　シンデシマツテ、ジブンノ　ウチモ　アリマセン、

(2)トモタチモミンナキナクナツテ、知ツテキルモノハ一人モアリマセン、

右(1)(2)の兩句は相互に對偶をなして、ゐること。平板をさける爲に語句に變化あらしめたる點に注意せしむへし。

(3)「オドロキマシタ」を文章の終末において、幾回も朗讀せしめて、何だか落付きのわるいことに注意せしむべし。

(四)文章(1)(2)を朗讀せしめ、次の書取を課す。

(1)リユウグウ　カラ　海ノ上ヘ出テ　カヘツテ來マシタ。

(2)知ツテキルトモダチハ一人モキナイ。

(3)父モ母モユクエガワカラナイカラ、オドロキマシタ。

(4)シブン　ノウチハ　ドコ　カ　ワカラ　ナイ　カラ、オドロキマシタ。

(5)ヨノ中ノ　カハツタ　ノヲ　見テ　オドロキマシタ。

綴方

(一)本文の儘之を暗寫せしむ。

第五時

教材　何ダカカナシクテ……ナツテシマヒマシタ。（自七三頁一行至仝七行）

要項

内容＝浦島太郎がなしさの餘り玉手箱を開くこと、

形式＝(**語句**)―何ダカ、カナシクテ、白イケムリ、ニハカニ、シマヒマシタ、(**假名遣**)―ワスレ、ニハカニ、オヂイサン、シマヒ、(**語法**)―モ、(**修辭法**)―カナシクテ、カナシクテ、(**反覆法**)

教材解釋

形式

(一)語句並に語法修辭法

○**何ダカ**　「なんとなく」といふ程の意味である。「何ダカカナシクテ」といへば、そぞろに悲哀の情が催して抑へるに抑へられないの意味を含蓄してゐる。

○**ニハカニ**　副詞である。急なるさまで、たちまちに同じ。用例　にはかのもようしで、ゆきとどかぬ。

○**モ**　物事を並列する時に用ひる天爾乎波である。ここでは並列する他の語辭が省略してある。「オトヒメノイツタコトモ(アトサキノコトモ)ワスレテ」のなどのごとし。其の他の例は「私も(外の人も)行く。」「ここからも(あそこからも)見える。」などのごとし。

○**反覆法**　悲しみに堪へざるの狀態を活躍せしめんが爲に「カナシクテカナシクテ」と同じ語辭を反覆したのである。

(二)文章解剖

(1)何タカカナシクテカナシクテタマリマセン。
副詞句　副詞句　副詞句　説　副詞句

(2)主語アマリカナシクナツタカラ、オトヒメノイツタコトモワスレテ、タマテバコヲアケテ見ルト、中カラ白イケムリガ出テ、ウラシマハニハカニオヂイサンニナツテシマヒマシタ。
副詞句　副詞節　主修　説　主　副　補　説明語　副　主修　説明語

教法

(一)次の發問と書取とを課して復習的豫備とす。

(1)浦島が龍宮より歸る時に、乙姫は何といつて玉手箱を渡したか。

(2)浦島が歸り付いた時の鄕里の有樣は如何。

(3)書取、父母モ、トモダチモ、知ツテキル人モ、ミンナキナクナツテ　ジブン　ノウチ　モ　アリマセン。

(二)文章(1)(2)の通讀をなさしめ、左の各項の取扱をなす。

(1)何ダカ、ニハカニ、白イケムリ、シマヒマシタ　の語句の意義。

(2)カナシクテ、カナシクテ　と語句を反覆したるわけ、

(3)モの天爾乎波にて惘然自失したる他のものを省略しゐること、

(三)次の發問にて內容の整理と共に話方の練習をなす。

(1)何故に浦島はかなしかつたのか。

(2)玉手箱をあけて見ると如何であつたか。

(3)乙姫がこの箱は明けてはいけないといつたのに何故に浦島は明けて見たのか。

(四)再び文章通讀の後次の應用練習をなす。

(1)何ダカ　オカシイ。何ダカ　オモシロクテ　オモシロクテ　タマリマセン。

(2)キレイデ　タマラナイ。キタナクテ　タマラナイ。

(3)アマリ　カナシクテ、何モ　カモ　ワスレテシマツタ。

(4)ニハカニ　中カラ　ケムリガ　出マシタ。

(5)白イケムリ　ガ　出タラ、スグ　オヂイサン　ニ　ナツタガ　ニハカナ　モノダ。

(五)讀本を朗讀せしむ。

綴方

一、ウラシマガ　タマ手バコ　ヲアケル　コト。

前題を與へて讀本の文章を記憶のまゝ暗寫せしむ。

第六時

教材　第二十五　ウラシマ　ノ　ハナシ　(二)　全體の復習、

要項

内容＝(一)ユクワイナコトモ、タビカサナレバイヤニナルトイフコト。
(二)ウラシマ、オトヒメニ　ワカレヲ　イフ　コト。
(三)オトヒメ、ウラシマニ　ワカレヲ　イフ　コト。
(四)ウラシマ　ウチニカヘツテ、ヨノウツリカハリニオドロク　コト。
(五)ウラシマ　タマテバコ　ヲアケテ　オヂイサンニナル　コト。

形式＝(一)毎、海、知、(來、出、何、白)
(二)毎日、アキテキマス、オセワ、オナゴリヲシイ、ケツシテ、オドロキマシタ、ニハカニ

教法上の注意
(一)全文の通讀をなさしめ、漢字及語句の練習をなす。

(二)各段の通讀をなし。その内容をまとめしむ。
(三)まとめたる内容によつて話方の練習をなすべし。

綴方
(一)ウラシマ　ノ　カヘリ。
右の問題を與へ讀本の繪畫によりて之を記述せしむべし。

教材　第二十四　第二十五　ウラシマ　ノ　ハナシ　(一、二)　總練習、

要項

第七時

内容
(一)ウラシマ　ガ　カメヲ　タスケル　コト、……あたま
(二)カメガ　ウラシマ　ヲ　リユウグウ　ニツレユクコト、……
(三)リユウグウ　デ　ノ　ゴチソウ、……
(四)オトヒメ　トノ　ワカレ、……
どう

(五)ウラシマ　ヨ　ノ　ウツリ　カワリ　ニオドロクコト、……」
(六)ウラシマ　オヂイサン　ニナツタコト、……を

教授上の注意

(一)全體を通讀して、右の文段をまとめること、
(二)まとめたる文段によつて話方の練習をなすこと、

いろは、

解釋

いろは歌といふ。その讀方は左の如し。

色は匂へど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ、
有爲の奥山今日越えて、淺き夢見じ醉ひもせず。

此は僧空海の作なりといふ。涅槃經の四句の偈、即ち諸行無常、是世滅法、生滅滅亡、寂滅爲樂。の意を採りて作りしものなりといふ。蓋し佛教流布の一手段として、用ひられしなり。されど音韻の上よりいへば「いろは歌」は五十音圖よりも値價なきものといふべし。

(參照)この「いろは」の四十八文字は、數年前新聞紙「萬朝報」の懸賞によりて得たる新排列次の如し。

鳥啼く聲す　夢さませ　見よ明け渡る東を
空色はえて沖つ邊に　帆船群れ居ぬもやのうち、

方法

(一)之を二時間にて課すべし。
(二)第一時間には拾ひ讀み(歌の文句としてにあらず)にて其の讀方と書方との練習をなし、暗誦をもなさしむべし。
(三)第二時間には歌としての讀方と書方とを練習し。尚暗誦をもなさしめおくべし。
(四)書方の練習として全級兒童の姓をいろは順に書かしむべ

し。

附錄

▲本卷に現はれたる漢字、

▲日本（日本ホン）（既習）　▲小（小トリ小サイ）（既習）　▲人（三人ヒト）（既習）　▲一人（ヒトリ）
▲中（日本中チユウ）　▲上（ウヘ アガリ イボリ）既習　▲手（テ）　▲私（ワタクシ）　▲牛（ウシ）　▲足（アシ）　▲力（チカラ）
▲馬（ウマ）　▲竹（タケ）　▲作（ツクツタ）　▲舟（フネ）　▲田（タ）　▲入（イレテ）　▲女（ヂヨナ）
▲母（ハハ）　▲光（光つて ヒカリ 光らない）　▲行（きませう イ）　▲見（せて ミ）　▲言（ふ イ）
▲今（イマ）　▲出（ます デ）　▲心（もち コヽロ）　▲右（ミギ）　▲左（ヒダリ）　▲方（ハウ）　▲東（ヒガシ）
▲西（ニシ）　▲南（ミナミ）　▲北（キタ）　▲男（ヂヨナコ）　▲思（ふ オモ）　▲虫（ムシ）　▲又（マタ）　▲居（テ）
▲何（ナニ）　▲早（ハヤク）　▲今日（コンニチ）　▲赤（イ アカ）　▲色（キ色 イロ）　▲青（青と 青して アヲ）
▲魚（ウヲ）　▲石（小石 イシ）　▲貝（カヒ）　▲合（ふ ア）　▲賣（る ウ）　▲買（つて カ）　▲
太郎（太イ（既習）タロウ）　▲門（モン）　▲來（キタ）　▲毎（毎日 マイ）　▲海（海ノ上 ウミ）　▲知（シ）

ッテ

▲漢字の總練習

一、右の表（假名を附せず）によりて、讀方の練習をなすべし。

二、右の漢字を使用して、短文又は短句を作らしめ發表の練習をなすべし。

三、書取の練習をなすべし。

毎時配當

尋常小學國語教授細案卷三 終

614

尋常小學國語教授細案卷三

定價金六拾錢

明治四拾參年壹月廿五日印刷
明治四拾參年壹月廿八日發行

普通教育研究會　編纂

發行者　松邑孫吉　東京市京橋區南鍛冶町一番地
印刷者　青木弘　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

關東發賣元　東京市京橋區南鍛冶町　三松堂
關西發賣元　大阪市東區備後町四丁目　寶文館